

大学図書館問題研究会 第43回全国大会(京都)

日時:2012年8月4日(土)~6日(月)

場所:コミュニティ嵯峨野(全国手話研修センター)

第7分科会:利用者支援B

日時:2012年8月5日(日)13:00-15:30

場所:2階「愛宕」

担当:渡邊さよ(広島経済大学図書館)、大綱浩一(京都大学附属図書館)

タイムテーブル:

1. はじめに(5分):分科会の趣旨説明
2. 講演(60分):長澤多代先生(三重大学附属図書館研究開発室、*4)
協働する図書館:図書館員による教員とのつながり方の開拓
3. 事例報告(40分):小畑佳弘氏(神戸学院大学図書館、*5)
図書館留学:教職協働の学習支援への取り組み~語学力の向上に向けて~
4. 休憩(15分)
5. ディスカッション(30分)

配布資料:

- | | |
|-----------------|----|
| 1. 本紙 | 1枚 |
| 2. 参加者名簿(第7分科会) | 1枚 |
| 3. 長澤多代先生 | 5枚 |
| 4. 小畑佳弘氏 | 7枚 |

予稿:

本分科会のテーマは「協働する図書館:図書館活動における図書館の新たな役割について考える」です。

図書館活動は、これまでサービスを提供する側(=図書館)と享受する側(=利用者)という二元論で語られてきました。しかし、近年、図書館業務サポート、学生選書、学習支援、学生サークル・その他等の協働(*1)により、その関係は微妙な変化を示しつつあるように思います。

1992年、ローマンによって「コモンズ」というコンセプトが提唱されました(*2)。このコンセプトの原点である古代ギリシャの「Kinonia」は、次のように定義されるとされています(*3)。(1)参加の自由が認められ、(2)共通の関心/目的を持ち、(3)人材、資金、知恵などの資源を共有し、それをもとに協働する、(4)相互扶助し、(5)フェアネスを基本とする。

図書館活動は今まさに、この「Kinonia」の定義が示すような共同体へ移行しようとしているのでしょうか。サービスを提供する側とされる側という固定的な関係を越えた、自由意志による対等な協働関係へ移行しようとしているのでしょうか。

ランガナタンは「図書館学の五法則」において、次のように述べています。(1)図書は利用するためのものである、(2)いずれの読者にもすべて、その人の図書を、(3)いずれの図書にもすべて、その読者を、(4)図書館利用者の時間を節約せよ、(5)図書館は成長する有機体である。

この法則に、(6)人と人をつなげる、が付け加わろうとしているのでしょうか。

本分科会では、講演と事例報告、ディスカッションにより、「図書館は、人と人とのつながりを創造する場となりうるか」その可能性と図書館の新たな役割について考えたいと思います。

(*1)「学生協働まつぶ:ku-librarians勉強会」

<http://dl.dropbox.com/u/15665405/map/index.html>

(*2)コモンズ:人類の共働行為:NPOと自発的行為の新しいパースペクティブ/Roger A. Lohmann著;溝端剛訳.--西日本法規出版,2001

(*3)「NPO」幻想と現実:それは本当に人々を幸福にしているのだろうか?/田中弥生著.--同友館,1999

(*4)教員と図書館員が連携する 学術情報リテラシー教育

<http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/literacy/h23/5.pdf>

(*5)「図書館留学:教職協働の学習支援への取り組み~語学力の向上に向けて~」

<http://lib.kobe-u.ac.jp/AULH/katsudo/23/kenkyu2/kobata.pdf>